

坂道を登るときは

長房囲碁同好会 池口 隆久

八王子五中の生徒だったときのこと(昭和 27 年)だ。運動会が大嫌いだった。走れば必ずビリ。1 日中運動場で屈辱の時間を過ごすのはなんともつらかった。だから教室の授業に戻るとほっとしたものだ。ところが、体育の時間は別だった。担当は、大学出たての若い高橋先生だった。体育の時間になるとまずは準備体操をする。準備体操が終わると、皆は先生の口元を見つめている。いつも決まって「競馬場まで」。いつもの決まり文句なのだが。期待をこめて先生のほうを見つめていると、やはり今日も「競馬場まで」。ワット湧く。皆駆け出す。

五中の校舎は、大和田橋の袂にある。今でもそうだが。大和田橋を渡り、甲州街道を東へ長い坂を登る。当時は八王子競馬場という名前だけで、競馬が行われることはなかった。さあ大和田の坂を登りきって、八高線の橋を渡ると右手奥に八王子競馬場の正門が見える。その正門の前で折り返し、もとの道をたどって五中へ走って戻る。

だから体育の時間は苦しかった。いつも「競馬場まで」だから。しかし、どの時間にもまして、体育の時間は印象に残っている。何しろいつも「競馬場まで」だったから。この体育の時間の総決算は、2 月に行われる年に一度のマラソン大会だった。この日は、午後の時間を使って五中から日野駅まで全校生徒が往復する一大イベントだ。当時は、多摩平団地はなく、甲州街道から豊田駅方面まで一面の原野が広がり見渡せたのが印象に残っている。

100 メートル競走では、必ずビリの私がこの日ばかりは丁度中間ぐらいの順位だった。自分としては上出来であった。筋肉痛の快い痛みで顔をしかめながら、手すりにつかまりながら階段を上ったのが思い出される。友達同士大声話しながら家路をたどるのは楽しかった。

身体を動かすのなら何でも得意の体の大きな友達がいた。うちの同業者である染屋の倅の松尾という男だ。この男が、あるときいいことを教えてくれた。「高橋先生がな、こう言うんだよ。誰だって坂道の登りは苦しい。だからこそ、平

地の 2 倍・3 倍の力を出せとね。高橋先生は何でもないような顔をして走っているけれど、やはり苦しいんだってさ」

これを教えてくれた松尾君は、昨年亡き人になってしまったが、彼の言葉は今でも私の中に残っている。とにかく、あのときの若き高橋先生だったら、はじめはゆっくりと弾むように走り、大和田の坂にかかると徐々に早くなるのだからとてもかなわなかった。戻るときには、最後尾に回り後ろから生徒の調子を見守りながら、軽く流していたが。

このときから 60 年後の今、私は、蛇滝の坂道を登りながら考える。ハアハアしながら考える。「平地の 2 倍の力を出さないでね」と。松尾君がそういつている。高橋先生が後ろにいると思えばいい。松尾君の分もがんばらなくては。70 歳でなくなった親父の分もがんばらなくては。今日はどうして亡くなった人のことばかり思い出されるのかな。本堂でよくお祈りをしてこようっと。二人の恩人のめいふくを祈り、二人に感謝していますと飯縄権現様に二人に伝えてもらうように、しっかりとお願いしなくては。

(八碁連だより 第 255 号 11 月号 2012 年 11 月 1 日)